

武蔵野

ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を
楽しみながら学ぶ

北村西望

きたむらせいぼう

戦後70年を迎えた今年。

長崎の「平和祈念像」や武蔵野市の「世界連邦平和像」を作り上げた、武蔵野市ゆかりの彫刻家・北村西望の生涯と、平和への想いをたどります。



時事通信フォト

長崎市の平和公園内にある平和祈念像。毎年8月9日の「原爆の日」には、この像の前で平和祈念式典がとり行われ、全世界に向けた平和宣言が読み上げられる。

井の頭自然文化園で生を受けた 長崎の「平和祈念像」

長崎市の平和公園に建つ「平和祈念像」。長崎市民の平和への願いを象徴するこの像の原型が、武蔵野市御殿山の「東京都井の頭自然文化園」で作られていたことをご存知でしょうか？

像の作者は、長崎出身の彫刻家・北村西望。明治から昭和にかけて日本の彫刻界をリードした世界的芸術家です。現在、井の頭自然文化園には、西望が使った住居兼アトリエをはじめ、作品を所蔵した彫刻館、さらに屋外にも数多くの作品が展示されています。彼がこの地にアトリエを構えたのは、平和祈念像制作のためでした。

北村西望は、明治17（1884）年12月16日、仏教をあつく信仰する長崎の名家・北村家の四男として生まれました。幼少の頃から図工が得意で、個性的で大胆な作品を作り、常に周囲を驚かせていました。京都市立美術工芸学校（現・京都市立芸術大学）、東京美術学校（現・東京藝術大学）を首席で卒業後、建昌大夢・池田勇八らと彫刻の研究会「八手会」を結成し、彫刻の道へ進みます。明

治41年、文部省美術展覧会（文展Ⅱ現在の日展）に入選し、大正5（1916）年には特選、翌年早くも無鑑査（過去の実績を元に、審査・鑑査なしで出品が認められること）となり、大正10年には東京美術学校塑造部の教授に就任します。西望、大夢に朝倉文夫を加えた3人は「文展の三羽鳥」と呼ばれ、昭和13（1938）年に国会議事堂に建てられた板垣退助翁像（西望）、伊藤博文像（大夢）、大隈重信像（文夫）を競作するなど、近代彫刻の第一人者として活躍しました。

像が大きければ大きいほど 平和を祈る力が強くなる

長崎市から、原爆犠牲者の冥福を祈る「平和記念碑」建立の相談を受けたのは昭和25年のこと。しかし西望は「記念碑ではただの記録にしかならない。平和を祈り、世界平和を呼びかける「祈念像」を」と要望し、祈念像の案を提出。その構想と情熱が受け入れられ、翌年、正式に依頼を受け、着手することとなります。西

望は、当時、北区西ヶ原にあったアトリエで早速試作に入りますが、最終的な像の原型を制作するために、より大きなアトリエを必要とし

昭和27年のアトリエ落成以来、生涯を武蔵野市で過ごした北村西望。昭和37年には武蔵野市初めての名誉市民に推挙された。



（写真提供 / 東京都井の頭自然文化園）

ました。

当初、西望が別の場所に確保した用地は、事情により手放さざるを得なかったため、東京都に井の頭自然文化園の一角を借用したいと求めました。これに対して都は「建設したアトリエと平和祈念像の原型などを後に寄付すること」を条件に、土地の使用を認めたのです。長年、井の頭自然文化園で説明役を務めた西望研究家の杉谷昭夫さん（85歳）は、祈念像制作にかけた西望の思いについて、こう語ります。

「西望先生は「祈念像は、大きければ大きいほど平和を祈る力が強くなる」と考えていました。後に「奈良の大仏、鎌倉の大仏といったふうな、そういうものを目指す大作願望が、いつか私の心の底にあったから、この像も現代彫刻中で世界最大のプロ



三鷹駅北口駅前広場に建つ世界連邦平和像。昭和35年6月に武蔵野市議会が「世界連邦に関する宣言」を行って10周年となるのを機に建立された。



現在、平和祈念像の原型は、アトリエ隣の「彫刻館A館」の正面に鎮座している。その大きさと力強さに圧倒される。



西望が使用したアトリエの外観。木立の中に溶け込むように建つ三角屋根の建物が特徴的だ。

(写真提供/東京都井の頭自然文化園)

ンズ像でなくてはいけないと思っ
た」と話しています」

長崎に建つ平和祈念像の高さは32尺(約9・7メートル)ですが、西望は当初、40尺(約12メートル)の像を企画していました。40尺の像を作るには高さ50尺(約15メートル)のアトリエが必要でしたが、当時の建築基準では木造建築物は40尺が限度だったため、像の高さは32尺となりました。

昭和28年、高さ40尺の三角形のアトリエが完成。翌29年には石膏の原型ができあがりました。その後、像を104個に分割して鋳造し、現地

長崎の平和公園で組み立てて設置。昭和30年、ついに長崎市民の平和への願いを象徴する高さ9・7メートル、重さ30トン、青銅製の平和祈念像が完成しました。天を指した右手は

「原爆の脅威」を、水平に伸ばした左手は「平和」を、軽く閉じたまぶたは「原爆犠牲者の冥福を祈る」という思いが込められています。昭和32年にはアトリエと、原型像を含む350点余りの作品が都に寄贈されました。

「長寿こそ人生の根本問題」 若き日の思いを体現した晩年

武蔵野市にはもうひとつ、世界平

和を訴えた西望の作品があります。

JR三鷹駅北口ロータリー中央に設置されている「世界連邦平和像」です。昭和44年、武蔵野市の「世界連邦宣言10周年」を記念して建立されたもので、駿馬にまたがった女神が、左手に平和の聖火を掲げ、右手は宇宙を指し、市民に平和の尊さを告げています。台座には世界各国の石48枚を配し、武蔵野市における戦没者の名が刻まれています。

西望は30代のときに、当時の美術誌にこんな一文を残しています。「作品を、大作を、ひとつでも多く残すには、長寿を保つことである。長寿

は自分にとって人生の根本問題なのだ」。晩年の人生は、まさにその言葉を体現するような日々でした。昭和33年、文化勲章を受章した西望は、その後も日展会長、日本彫刻会名誉会長などの要職を歴任しますが、老いてなお創作への情熱は衰えることなく、昭和51年には、皇居新宮殿に名作「天馬」を献納しています。

そして昭和62年3月、北村西望は天寿を全うしました。享年102歳でした。